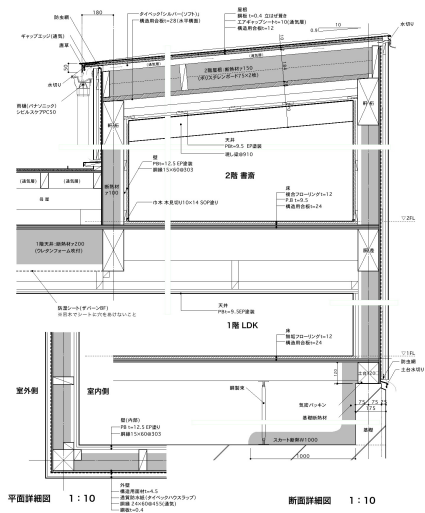


# リビング再考

Rethink Living



**House M** | 時を積み重ね、ますます愛着の感じるすまいへ





板壁の下に中庭とつながる開口（風通し）が見える



樹木を配したオープンスペース（駐車スペースを兼ねる）を家の景観の一部として





玄関と家族玄関を結合した空間  
スリットから周囲が差し込む



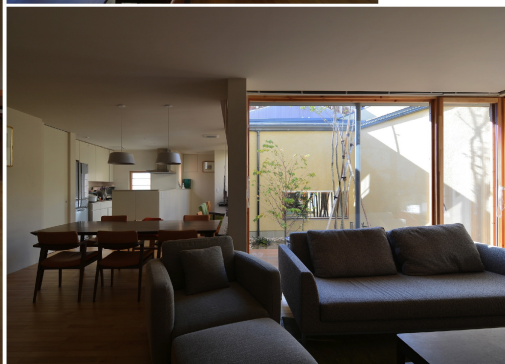
引き戸を開けて家族玄関へ

中庭に置したこどもたちのSTUDYコーナー



落ち着いたソファのコーナー  
ゆったりとした食卓コーナー  
照明のついた、  
こども達のSTUDYコーナー  
見渡せるキッチンコーナー

中庭を中心としながら、  
少しずついるんなコーナーと  
なっているリビングの様子





リビングの中心にかまえる食事のコーナー

トイレとお風呂と2階につながるクランク



日当たりの良いバルコニーのあるこども室



屋根ウラを利用した夫の隠れ家的書斎



ソファのコーナー（広さも充分）



## リビング再考

時を積み重ね、  
ますます愛着を感じるすまいへ

### リビング再考

よく家の中心は居間（リビング）、と言われる。  
居間ということばを文字通り解釈すれば「そこに居るための部屋」だしリビング=LIVINGを辞書で調べてみると「生活、暮らし」と書いてある。住宅の歴史を壁穴住居までさかのぼって考えるとはじめにすべての生活行為が一部屋で行われた住居があって、そこから調理、睡眠などそれ自身として分かれやすい行為のための部屋へと次々と分離していき、その後に残った行為をすべて引き受けているのが「居るための部屋」であり「生活するための部屋」となったのだといえよう。あとに残って分節化されない行為の複合体だから一言で付けようがないのは当然でそういう行為をあえて言い表しているのが「居る」とか「生活（リビング）」という言葉なのだろう。

それでは分化していった室のあとに残ったリビングは余白のようなものなのだろうか。もちろんそうではない、私たち設計者はむしろリビングを生活の中心に据えて住宅のプランを考えはじめる。

### 無為の行為の充実と居心地の良さ

現在、家族と呼べないような形態まで含めて社会単位としての家族の形はさまざまとなっている。昔の家父長制のようなものから核家族化の道を辿り個人単位の一人世帯がますます増えている現代社会では当然、その器となる住宅の形もさまざま形となっている。  
一人世帯の家は居室が分化の必要もないワンルームでもよさそうなものだが、「居る」とか「生活する」という空間体験を豊かな時間の中で過ごすためにはその言葉以上に積極的な意識がなければならないと思う。言い換えればそこには頼るべきものがない等身大の事実を受け止めて生きていかねばならない現代において、無為の行為が充実していることが必要なのだと思う。つまり豊かなリビング（生活）とはそれぞれに依拠する無為の行為の充実があること。そのためにはいづれもそこに居たい、という居心地の良さが居間に備わっていることが最も重要だと思う。

### 時を経て、さらに愛されるすまいへ

その居心地の良さを試行したのが今回の太郎丸の家。  
太郎丸の家は夫婦と子ども3人、計5人のための家です。上棟の時に小さな子どもたちが大工さんにお礼の辞を唱和してくれました。こんなこと初めてのことで。それくらい家族5人が仲良く暮らしたいと願った家です。家族5人が幸せな時を刻むための家づくり。  
しかし考えたのは子どもたちが成長してそれぞれの個室を使い始める頃、そして子どもたちが巣立って夫婦二人になって過ごす家と20年、30年時間が経過してもこの家が夫婦にとって「帰りたい家」であること、でした。そのために時間の経過という変化に対応しつつも変わらずそこに居たいと思うリビングを持っていること。家の中心にそんな愛着を感じる無為の充実のあるリビングがあることや時間の経過を記憶として断片化したリビングであること、などをイメージしながらプランを考えました。  
20年先に訪れたとき「この家に居るときが一番落ち着くんですよ」と声をかけていただけることを願って……

